

平成19年 7月28日（土）

みなとまちづくり生涯学習講座
シリーズ うみ ふね みなと〔第3回〕

海辺のアクティビティー海を見る市民たちー

NPO法人釣り文化協会代表理事

來田 仁成氏

<プロフィール>

NPO法人釣り文化協会代表理事。社団法人全日本釣り団体協議会専務理事、大阪府釣りインストラクター連絡機構代表、農林水産省水産政策審議会特別委員、フィッシングカレッジの講師を務める。現在、釣り文化協会において大阪湾の水質環境の改善のため、水質調査に取り組んでいる。



みなとは、基本的に立入禁止のところが多いですが、実際は朝から晩まで釣り人がうろうろしています。本日来られている方の中で釣りをなさる方もおられると思うのですが、一般的に、特に港湾関係の方々から見ると、釣り人というのは“あやしい”人種と見られているようです。

その“あやしき”には3つの要素があります。まず、釣り人はいつでもいます。早朝でも夜中でも、あるいはかんかん照りの昼間でも、釣り人はいます。つまり、時間を問わずに釣りをしているわけです。それから、どこにでもいることです。禁止されている場所でも、密かにさおを出している人はいる。3つ目は、見たところ何をしているかわからないことです。釣りをされない方には何に使うのかわからない道具をたくさん装備している。

関西国際空港ができた当時、そこで釣りをさせてほしいとお願いしたら、さお袋にどんなものを入っているかわかったものじゃないと言われました。実は、関空周辺は200メートル以内は航泊禁止ということになっております。

ですが、だんだん相互に信頼関係が出てきて、釣りをしている連中は、悪いことをすることはなさそうだと、少しずつご理解いただいているようです。私は30年近く朝日新聞の釣り欄を執筆していますが、そこで兵庫突堤でアジが釣れているという記事を出しますと、兵庫突堤にいっぱい人が集まります。兵庫突堤は本来立入禁止のはずですが、今の



ところはまだおとがめはありません。

きょうも港湾関係の方がたくさんいらっしゃいますけれども、改めておとがめのないようお願いいたします。

そういうわけで、私たち“あやしい”釣り人はいつでもどこでも糸を垂らして水辺のそばにいます。そういう釣り人が海を眺めておると、あることに気がついたのです。

大阪湾の釣りのシーズンは、桜前線とともにチヌやキスがやって来ることに始まります。そして、4月から5月にかけては、いわゆる菜の花くたしというような長雨が海に注ぎ、さらに梅雨の時期、大体6月の半ばあるいは7月の初めごろから真水と潮がまじった甘い潮の内湾やみなとに小さなアジの群れやイワシの群れといった回遊魚がみなとへ入り込んできます。それを、枝ハリスのたくさんついたさびき仕掛けで釣ります。

7月に入ると釣りも本調子になってきて、須磨や先ほど申しました兵庫突堤でマメアジが釣れます。アジは、大体2尋半から下が泳層とされています。サバは2尋あたりを泳いでおり、その下をアジが泳いでいるというように魚の群れは分かれて暮らしています。

まず、そのアジの群れの層が、だんだん上へ上がってきているのに気が付きました。8月はじめごろから、底にえさを降ろしても、何も食わないのです。それから、岸の立ち上がりのところにイガイが引っ付いて生息しているのですが、このイガイがいつせいにさっと落ちる。沿岸の魚というのはイガイの間に住んでいるゴカイや小さなカニ、エビをえさにしていますので、イガイが落ちたら、えさがなくなり、寄ってこなくなります。そし

て、落ちたイガいの塊が海の中で腐敗して臭いにおいがして、海全体が腐敗臭を漂わせる。10数年前からそういう日がたびたび起こるようになったのです。そして、8月の末になったら全く魚が釣れなくなる。イガイが落ちたらチヌ釣りのシーズンも終わりというのが釣り人の定評だったのです。

その理由について、たまたま水産試験場の先生方に話を聞く機会があり、それが水質悪化によるものであることがわかりました。

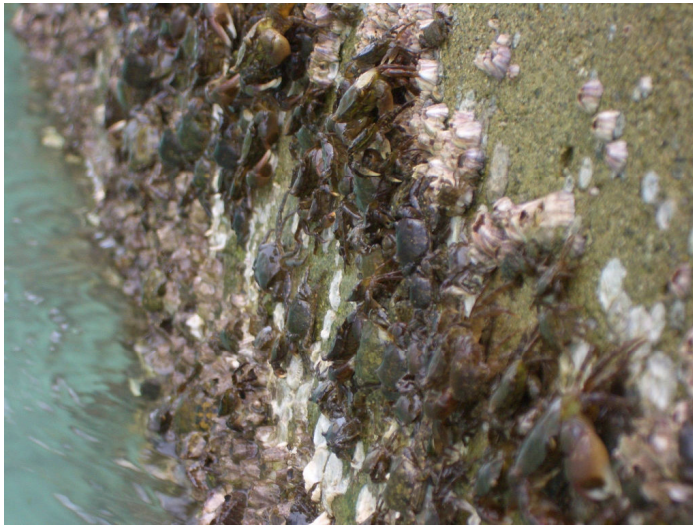
先ほどお話しましたように春から夏にかけて、菜の花くたし、そして梅雨と、真水である雨が海に降ります。そうすると、真水が塩水と混じってプランクトンが発生し、それが赤潮になるのです。赤潮は生物ですから、猛烈な勢いで酸素を消費します。そうして、赤潮のプランクトンの群れが死んでしまう。死ぬと海底に沈む、沈んでまた大量の酸素を消費する、そして、海の底近くが少しずつ酸素の少ない水に変わっていきます。さらに、その死骸の滞積から硫化水素が発生します。そこに、台風が本州南岸あたりを通り北や北西の風が吹くと、水面近くの潮が風に押されて沖へと動きます。大阪港の沖合の潮は淡路島



の方向へどんどん流れていきます。30センチから40センチほどの厚さの、海の表層の潮が移動すると、その下にある潮がわき上がる。これを湧昇といいます。岸の近く、特に尼崎などで、酸素が少なく硫化水素を含んだ水がわき上がってきます。硫化水素が海面に上がってきて空気に触れると結晶になり、海の水が白っぽく濁って青白く見えるのです。こ

れを青潮といいます。

堺の沖には、埋立地をつくる時に砂利を採取した穴が空いています。大阪湾の防波堤があるあたりの平均の水深は大体12、3メートルなんです。そこだけ20メートルほどあります。そこに硫化水素を含んだ青潮が溜まっているんです。我々の仲間でダイビングをやっているメンバーに、一度潜ってもらったんです。首から銀のネックレスをぶら下げて、それから真鍮の環のついた酸素ポンペを背負って潜りました。上がってくると、硫化水素でネックレスも環も真っ黒けになってしまった。



青潮が発生するとどんなことが起きるか。この写真をご覧ください。カニです。カニがびっしり青い潮の上にあります。水の中に入ったら酸素がないから陸に上がっているわけです。それから、この水につかっている貝たちは数日たったら全部死んで落ちます。

こちらは此花大橋の下ですが、海に筋が入って、黒と明るい水色に分かれています。この水色の部分が酸素の少ない硫化水素の潮です。これを見ておられた主婦の方が、その青さに日本の海もきれいになったとおっしゃっていましたが、この下でありとあらゆる生物が死んでいるんです。次の日潮が引いたらアサリがぱっくり口をあけています。エビも全部いなくなる。2、3日経ったらいろんな魚が腐り、腹を上にして浮いている。そして、海全体に異臭が漂う。それが青潮です。



そういうことを知ると、このままほっておくわけにいかない、みんなで努力しなければという思いが浮かんできたのです。

あるボランティア団体が大阪府の小学生に、「大阪湾で遊んだことがありますか」というアンケートを取ったところ、なんと30%しかなかったそうです。「大阪湾を見たことがありますか」という質問では、あると答えたのは70%でした。ここにおられる方々、皆さん多分海を見ずに育った方はおられないでしょう。しかし、小学生の30%が大阪湾を見たことさえない。子どもたちに海に



触れる機会さえ奪ってしまったのではないかと思います。そして、この問題は子どもたちに変な影響を与えるものなのです。

私は数年前まで保護司をしていました。当時住んでいた地区の非行少年、特に“少年”は、私のところへ連れてこられるのです。それで、一緒に釣りざおを持って防波堤へ船で渡ります。渡ったら逃げ場がないから、帰ろうと言うまで帰れない。それで、いろんな話をしながら魚釣りをしました。

今の時代、子どもたちはテレビゲームをしています。あれはイエスかノーか二者択一でストーリーを進めていくものです。彼らは、物事にはマルかバツで回答をするものだという思考の中で育ってきているのだと思います。



一方、魚釣りは一種の推理ゲームです。無限の可能性の中から1つを選んで、さらに次の1つを選んでいくというように思考を積み重ねていかないと成り立たない。それで、少年たちに、どういう仕掛けをつくる、どのえさを使う、潮の流れはどうだという考え方のプロセスを教えるんです。

暴走族をやっていた子も、学校の窓ガラスを100枚以上割った子も、シンナーで体をぼろぼろにした子も、もともとは素直な子ですから、釣りを通して考え方のプロセスを学び、推理して考えを組み立てるという作業に没頭し、おもしろかったら彼らは素直になってくれました。そうやって1匹目の魚を釣り上げたときの感動は、二度と忘れません。海とは、子どもたちにそうした貴重な体験を与えることのできる場所だと私は思います。

しかし、海の環境が汚染されているからといって「海を汚すな」とだれかに文句を言ったって仕方ないんですよね。先ほどお話しました堺にある青潮の溜まりなんて埋めればいいじゃないかという意見もあるのですが、そう短絡的に結論を出すわけにはいかない。また別の湾の奥は航路ですので埋めると船が通らない。船を通さないと日本の国の産業が成り立っていかないわけです。海の方が大事だと主張したところで、我々は化学繊維の服を着て、電気を消費するクーラーの中で過ごしている。社会はそれを享受して動いている

わけで、そのこと自体を悪いととがめても仕方がないと思うのです。

それよりも、まずはそうならないようにどうするか、例えば、横から流れ込む潮の道をつくり、水が入れかわるように工夫することで少しましになるのではないかと——ただ、そこまで考えるのは釣り人の能力を越えていますから、自分たちで簡単な調査をして、専門家の方々に報告し、きっちりと調べてもらって、国土交通省の方々にも、皆様にもいろいろな方向から考えて、みんなで意見交換しながら、今よりも良い方向にしていきたいと思いますというのが、現在における我々の結論なのです。

それで、釣り文化協会では市民による大阪湾水質調査を平成17年から始めました。昔から水質検査は、水産試験場でも国土交通省でも海上保安庁でもやっておられます。しかし、すべて沖合での観測です。お話しましたとおり、実際に青潮が発生するのは岸のあたりですから船はうろうろしていません。そのあたりをうろうろしているのは、冒頭でお話しましたとおり、いつでもどこにでもいる“あやしい”釣り人なのです。

水産庁の調べによりますと、全国の釣り人は述べ5400万人、実質の人数は現在1200万から1300万の間と言われています。この中の誰一人として、海から魚がいなくなっていいとは思っていないわけです。このパワーを利用しない手はありません。この人たちが水質保全への取組みを始めてくれれば、やがて日本全国の海を回復させるための1つのキーになるのではないかと考えています。

水質調査を行うにあたり、合言葉を「ちぬの海ふたび」としました。このキャッチフレーズは、実は今から25年前からすでにありました。そのころ、チヌは少なくなって1週間毎日出かけて1回当たりがあるかないかという状態にあったのです。そこで、われわれはちぬの稚魚の放流を始めたのです。その活動がそもそもの「ちぬの海ふたび」だったのです。

水質検査を専門的にやりますと8月に調査したものは12月ごろデータとしてまとまるのですが、我々はそんなに待ってられない。それに、すぐにわかって今日は酸素が少ない



から、浮き下を浅くしようとか、自分の釣りにも結びつけられて利益があるようなものにしたかったのです。

そのために、釣りの片手間にできるよう、釣り道具を加工した手づくりの調査器具をつ

くりました。それをご紹介します。

まず塩分濃度の計器をウキでつくりました。塩分の濃さによってウキの浮き方が違う。ここまで沈んだら真水だとわかるわけです。

それから、水の透明度をはかるために、要らなくなったCDにひもをつけて沈めて、見えなくなったら、透明度の何メートルという地点だとわかります。



ごらんのように1メートルごとに白いスポットがあります。5メートル伸びますと別のスポットが出てきて、10メートル伸ばしますと糸の色が変わる。これも釣り道具でできています。

それから、大阪湾の海は、夏になると黒く見えます。しかし、上の方4、50センチだけ水面近くにプランクトンがいて黒いわけです。下はきれいな海ですよ。プランクトンも間違っ



りです。そういうことを知ってもらうために、海の色でプランクトンの種類がわかる色見本をお渡ししています。海の色を眺めて、海面はこんな色だけど、40センチ下はまた違う色で、はかるたびにきれいな大阪湾に戻りつつあることをそれぞれの人が認識してくれたら、この海を再び汚すようなことがあってはならないと考えてもらえる

のではないのでしょうか。そして、このサンプルを学者の先生にお渡しして、どういう種類のプランクトンがことしは発生しているかを判別していただくわけです。要らなくなったペットボトルで底潮採取器を作って沈めて、海底の水を汲みます。その水を、釣りざおのケースを切ったものの中に溜めて、水の塩分濃度をはかるのです。そして最後に、釣り用の折り畳みバケツで表面の水を汲みます。こうした水をアンプルで調べますと、酸素がどのくらい残っているか、水素イオン濃度はい



くらかわかるわけです。こんなちょっとした道具が、日ごろ科学と何の関係もない魚釣りをしている人間には楽しかったりするのです。

また、計器にいらなくなったものを使っているところがみそで、こうした調査においても無駄を出さずに再利用をしたいと考えています。

データはファックスで送ってくれる方もいますし、ネットからで送ってくれる方もいます。携帯メールで送ってきてくれる方もいます。また、どこかでだれかが青潮を見つけたら、大急ぎで走り回ってどこがどんな状態だったかを調査するために、一斉に電話で情報交換をして、みんなで近くの海をのぞいてチェックするという情報網を今展開しつつあります。数字で出すことよりも、どこでどんな方向の風で青潮が起きているか、そしてそれを防ぐためにはどうすればいいかを調べてもらう基礎的なデータを我々は集めているわけです。そうした取組みで去年調査したサンプルは300以上になりました。

その中で、釣り人の皆さんの海への関心がものすごく強くなったと感じています。ところが、おかしなもので魚がよく釣れているときは調査サンプルがあまり集まらないんですね。釣れなくなったら、調査をしてくれているようです。でもはじめは釣りのついだった調査が、いまでは、調査をするためにわざわざ海辺に出かけるようになった人もいます。

実際に海をきれいにするためにまずできることは何かというと、生活廃水の汚れをできるだけ少なくすることです。リン系統などさまざまな化学物質の排出を減らすことです。ある学者に言わせると洗剤は現在お使いになっている3分の1の量できれいになるそうです。でも、「うちの食器は絶対きれいにしたい」「うちの子に着せるものは絶対きれいにしたい」と思われるのは当然です。子どもを持つ親なら、誰だってそうでしょう。

ですから、我々は子どもたちが「大阪湾はこんな状態だから、だから生活排水を少しでも少なくしよう」とお母さん方に直接伝えてもらい、そこから1つのムーブメントを仕掛けようと考えています。それが、皆さんのお手元にチラシがあると思いますが「夏休みジュニア大阪湾水質調査の日」というイベントです。

7月29日と8月4日5日と、大阪南港でジュニアのための水質検査のレクチャーをします。朝は魚釣り、10時ごろから水質検査の説明を行い、その後実際に水質検査をしてもらおうと考えています。その結果をレポートにまとめると、簡単に夏休みの自由課題がで

き上がります。これは国土交通省の主催で8月6日、7日に行われる大阪湾一斉水質調査と連動しておりますので、[ホームページ](#)上で結果をごらんいただけます。

また、もう1枚のチラシは、海へ行って水の透明度と溶存酸素を月に1回か2回調査してくれる方を募集するチラシです。かた苦しい調査ではなく、一種の遊びのようなものです。



これで終わらせていただきます。

それから、機会がございましたら、[釣り文化協会のホームページ](#)をごらんください。本日申し上げたようなことが写真を交えて紹介しています。

市民の方々に広く参加をしていただきたいと思います。本日参加いただいた方の中でも、水質調査につき合ってやろうという方がいらっしゃいましたら、ぜひお申し出ください。こ